

介護老人保健施設 オアシス21 (療養棟)

症例概要 利用者氏名：Y・W様 (男性90代 要介護1)

病名：直腸癌術後 (人工肛門造設)

経過:平成7年、直腸癌にて人工肛門造設、退院後は自己管理で自立生活を送っていたが、妻・長男・三男が他界し、独居生活になり精神的な落ち込みから活動減少。便があまり出ないように食事量を自分で制限され、体重が32.2Kgまで落ち低栄養状態。次第にストーマの自己管理が困難になり、人工肛門狭窄もありK病院に入院。術後はストーマ自己管理ができず、平成31年4月にオアシスに入居となる。オアシスでは看護師がストーマの種類の見直し、リハビリでは座位姿勢の改善、栄養士による低栄養の改善、日常のケアではご本人の不安の軽減等から自宅への独居在宅復帰が実現。訪問看護と連携し、オアシスの通所に通われるなど7年ぶりに外の活動に参加ができ、輝きの日々を送れるようになった症例。

内 容

入所当時のWさんの状況

ストーマの自己管理ができず、ご自身で便の量を抑えるため、食事量は半量ほどしか食べず、低栄養で体重32.2kg。周りからの反応やにおいが心配で、何度も「家に帰りたい」と話していました。入所前の生活歴は、ストーマのことが気になり、7年間も閉じこもり生活されていた。

ご本人は独居でありながらも自宅での生活を希望されており、別居の娘さんも「本人が希望しているのなら、家に帰してあげたい」とのことから、90代独居ではあるが、目標を自宅退所とした。

初めに、ストーマの自己管理ができるよう、看護師は身体的アセスメント。ご本人からのヒアリングでは、嵌合部の接続がうまくいかず、便が漏れてしまうことがあったことから、自己管理が簡単でありつつ、体に合ったものに変更。更には臭いを気にされていたことから、自己管理の方法を指導。交換時には消臭力の高いスプレーを幾つか試し、一番良いものを提供しました。

仙骨部が突出しており端坐位も前屈姿勢であったことから面板がはがれやすい状況であったため、リハビリにて下肢筋力強化や座位姿勢の耐久性に取り組み、端坐位姿勢を正し、仙骨部の皮剥けも治癒。低栄養については栄養士が関わり、食事量の観察、栄養食品ゼリーの提供から体重37.1kgまで増量。その後は、「この食事は美味しい」「ついつい食べ過ぎてしまう」と笑顔も見られるようになった。

退所前訪問では、自宅前の段差、2階までの移動の環境整備。

在宅復帰に対して未解決であった、本人拒否の介護サービスの導入には、しっかり説明し、訪問看護と通所リハの導入は、入居中に通所リハの体験で、一番の不安であるトイレの体験をすることで、その不安も解消。

現在は退所され、訪問看護を利用しつつ、約7年ぶりとなる自宅の外での活動としてオアシスの通所リハに笑顔で通われ、ストーマの自己管理をしつつ行事にも積極的に参加されています。